

日本沿岸に於ける社會の地緣

—主として海村を中心として見たる—

中 田 榮 一

序

マキイヴアに依れば、共同體は共同生活とともに共同の土地をそのうちに包含せる概念である。のみならず、彼は單なる血緣のみを原始群に於ける結合の機縁である^①と見るべきではなく、それは土地を占めてゐる血縁であり、この限定なくしては結合の本質もまたその限界も理解され得ないと主張してゐる。社會學に於ける斯くの如き所謂「地緣説」は、地緣が共同體結合の機縁として、如何に重要な意義を有するかを明らかにしてゐるのである。

ラツツエルの決定論の如く自然の優位を強調せざると

も、社會には自然環境的規定を機縁とする一面のあることはいなみ難い。而して自然は亦、人間集團の動態的過程に於いて、横糸の如くにして織り込まれてゆくと解される。自分は「土地」を認識するに當つて、「地緣」を重大なる地理的現象として扱つてゆきたい。^②

なほ題材として「沿岸地域」を選定したのは、日本の「生活空間」としての地域的特性を認めたからにすぎない^③が、然しながら「地域」はあくまで相對的である。従つて沿岸地域は内陸地域に對比して見られねばならず、而して又日本の沿岸地域も日本以外の諸地域の沿岸地域とも相對して考察されねばならぬ。斯くせねば、眞に「日本沿岸」は認識されたとは言へぬであらう。然しながら此

の事は短時日の間によくなすところではなく、又此の様な研究はあくまで詳細なる地域的研究に俟たねばならぬ。此の點よりみて、此處に書き下した小論は極めて粗雑な研究であり、沿岸研究の、而して又地理學研究の一應の入門にすぎざるものである。

更に日本に於ける沿岸史の研究は、現在なほ未だしと言はざるを得ぬ状態であり、此の事が如上の方法を以つて研究せんとする場合に當つては、大なる障害となることはやむを得ない。資料不足も、未だ研究の進まざる此の分野にあつては致し方がない。昭和十四年夏以來自ら調査した各地方の資料及體験を基とし、沿岸地域に關する諸文献をその補ひとして一應の概觀をなし、且つ問題二二三に就いて臆測をたて考察してみたにすぎない。

(此の小論は昭和十五年末に草稿せるものなるが、此度び幾分の補訂を加へて掲載することとした。なほ紙数の都合上本文及註の多くの部分を割愛したる爲め、極めて抽象的にして不明確なるものとなり終つたことは遺憾である。)

註① MacIver: Society, p. 63. 難波紋吉著「米國文化社會學研究」二一三頁による。なほ原始群は常識的には専ら血縁によ

日本沿岸に於ける社會の地縁

ると考へられてゐる。

松本潤一郎博士は社會集團構成原理として「相互的接觸なる專柄を考へられるが、之はマキエアの此の様な考へを更に掘り下げて體系化したものと解される。(松本潤一郎氏「集團社會學原理」二五頁以下)

② 此處に意味するところの自然は、決して自然科学的自然ではなく、所謂歴史性を有し、社會性を有する「自然」、いはば人文的自然とも言ふべきものたることを論を俟たぬ。此の事は地理學に於いて、人文現象をみる場合に當つては、見逃し得ぬ要件である。

③ 「地縁」は通常、社會學に於いては「地縁社會」として「血縁社會」に對して言はれてゐるのであつて、地縁社會とは「自然環境の規定を機縁として發生をみる社會類型」に附された名目として用ひられてゐる。(今井時郎氏「社會學大綱」)而して此の「自然」とは土地的事項、即ち地形・土壤・氣候・動植物などを言ふのである。藏内敷太氏に依れば、「先づ土地がその生産性を通じて肉身の、多數の肉身の根元であることに基づく所の土地に對する依存感情と、これに於ける人々の共屬意識があげられる。次に土地はその恒久性に於いて、生と世代繼續の場所であり、その廣袤性に於いて多數の身體的存在者の場所であるが、此の最自明的なる專柄に對照して、吾々の社會體験は全體なるものへの歸屬の意識をその構造の中に含んでゐると言ふことが存する。……土地としての空間

は、恰も歴史的時間の如く、異質の連續、即ち個性的地域の連續であるが、此の事は體験的には土地が個性的景觀として社會の象徴なることを意味する。第二に人間がその工作物を通じて土地に附與する意味がある。……第三に自然從つて土地に對する若干の基礎的體験様式がある。……(藏内數太氏「地緣について」社會學年報第四輯)然しながら先に述べたマキヱアや高田保馬博士、白井助教或は松本博士の言はれる如き「地緣」は「相互の接觸交渉」を指してゐられるのも、「それはとりあへず社會過程の行はれる人間的範圍或は地盤としての人間社會集團團結の機緣となる」からである。(松本博士前掲書一〇頁)此の様な社會に於いて「或度以上の濃度を有するところには、之等多數人に共通な行爲乃至生活の様式が支配する」時の自然的規定を「社會の自然環境的規定」或は同じく「制約」と呼ばれるのであるが、自分は地理學的觀點よりして便宜上、以上の諸氏の言はれる「地緣」もすべて自然的土地を機緣とすることから、極めて亂暴と思ふが、「自然環境的制約」も同じく「地緣」と稱してゆくことにする。但し、「相互的接觸」をば最も重大な、そして根本的であり、最も明的な地緣として扱ふのであり、第二章に社會の封鎖性と開放性(解放とも書くが、自分は此の文字を使用してゆく)を論じたのも斯かる理由に依るのである。斯くして如何なる社會と雖も、その程度或は仕方の相違こそあれ、いづれも「地緣」なる一側面を有することは明かである。そして亦かゝる前提

の下に、「地緣」を地理的現象として、土地をみるに當つて用ひたのである。而して又自分は「地緣」をあくまで動態的、歴史的にも眺めてゆくべきだと考へる。なほ集團の「環境的制約」に於いて、松本博士は「外的自然環境」に對し「内的自然環境」なる環境的制約を考へられ、これは集團構成に参加する人々の、肉體的心理的兩方面の自然的所與性であり、「人種的事項」がその主たる内容であり、「人口種類」と「人口數量」をも含ましむべきとされる。一言注意して置く。

④「土地」即ち「生活空間」としての「地域」を地理學的の對象とすべきことは、既に自明なる事柄である。生活空間に於ける社會集團は即ち「地域社會」である。「社會は相互に直接間接、接觸交渉を有する多數人よりなる。而して斯かる接觸交渉が或度以上の濃度を有するところには、之等多數人に共通な行爲乃至生活の様式が支配する。斯くて社會性は生活様式より見てゆくべきである。文化は人間の社會的價值による。斯くて大體文化なるものは、一應行爲の様式と規定してよからうと思ふ。唯それを人間のイデオの實現とか、目的の達成からみれば文化である。」(白井助教教授昭和十五年度特講「社會の自然的基礎」)生活空間を此處では唯漠然と「人の住んである地域」として置きたい。人間が必ず社會生活をなす以上「社會生活の行はれてゐる地域」と言ふことになる。従つて此の「地域」は自然そのもののみを意味するのではない。

斯くて如上の觀點よりして、日本に於ける生活空間(日本

自體の一つの生活空間であるが)は、結局山地(溪谷・盆地を含む)及平野、それに周縁部である海岸(便宜上沿岸に海岸として用ひる)の三つに分け得やうかと思ふ。これはつまり概して日本人が山頂に住まないため、斯くの如くなつてゐる譯で、將來は別としてともかく現在吾々の見るところでは、以上の三つに分けられると考へる。(此の點西田教授が昭和十四年度日本精神史講義中、日本を「海洋的」と「溪谷的」とに分けられて考へてゐられるのも意味があり、瀧川政次郎氏が日本社會の地理的環境を島嶼的地形と山岳的地勢に分けて考察されてゐるのも極めて妥當と心得る。(瀧川氏「日本社會經濟史論考」)海村とは海岸にある地縁社會の意で、山村に對し考へられるものにして、自然的海岸を機縁として生れた社會のことである。而して日本では海村即漁村となつてゐない點より考へ、海村なる語は適當と考へる。

牧田茂氏が海岸に住む人を海民と言はれるのは此の點適切と思ふ。

然し此處では沿岸社會として特徴のある漁村が中心となり來ることは當然である。又沿岸社會と言へば都市を含むも、繁雜を避けるため一應此處では海村を中心として考察した。又地域も主として北海道を別にした「日本内地」の範圍に限つた。

日本沿岸に於ける社會の地縁

日本民族と沿岸

神の成せる御國、大八洲は四周環海である。

一度び記紀の神話を緝けば、海と共に生活し、海と共に成長してゐる遠き神代の吾等祖先の姿が、髣髴として眼前に浮び來るであらう。斯くの如き日本民族であつてみれば、神武天皇の御東征に始まる建國の歴史が、海洋の御制壓に始まるのは蓋し當然であると言はねばならぬ。海と親しかつた古代日本人の中には當然沿岸に住んだ人が多かつたに違ひない。栲繩の千尋繩打ち延へて口大之尾翼鱸佐和佐和邇控き依せ騰ける海人、或ひは神功皇后征韓の折、西海に出て國有りやを祭せしめられた吾瓮の海人烏摩呂や磯鹿の海人名草、さては應神天皇三年十一月に訕嚏きて、後にその功により宰となつた阿曇連の祖大濱宿彌によつて平けられた處々の海人、更に同五年山守部と共に定められた海人部など、古代日本の沿岸には漁して生活した多くの人々のあつたことをうかゞひ得る。

第二十八卷 第三號

六九

現今九州西岸や瀬戸内海でみられる家舟チボネの如く、家族をのせて海にさすらふ漁民の生活が、日本往古の海人部の人達の姿であつたらうか。それとも岬又入江の日本沿岸にさゝやかなる部落をなして、日々を暮した人々が多かつたのか。遠き古の沿岸の姿は茫漠として知るを得ないが、櫻田勝徳氏の言はれるが如く、^①昔の海人部の人達が長い海岸線に互つて散在し得たのは、子供を連れた夫婦らが荒海を越して漁に出た爲めであつたらう。

獲物豊富な潮の流れが日本沿岸を洗ふところ、身を小舟に委ねた海民が魚族を追うて移つたからであらう。又靜かなる大海に釣するために乗出した人々が、思はずりし時化シメツに遭ひ、何處へともなく流されて行つたらう。

山岳重疊の日本の土地は、古來幾百のクニに分たれた。而して此のクニは早くから一小社會を形成し、それを又クニと言ひ、クニノミヤツコ(國造)の治めるところであつた。^②生活空間としての盆地或ひは平野は、斯くの如くクニと言ふ一地域社會と一致してゐたのである。斯く日本は多くの社會に分たれ、特殊な生活様式がそこに

支配したのであつたが、然しながらそのことは全く普遍的なる民族文化の特殊化に於いて成立する個別性にすぎず、實は國土の邊境に位する地域も、齊しく外に對しては特殊な同一民族文化に配與したのである。^③交通發達せざる古代に於いては、山又山の地形は大きな交通上の障害となつたであらうから、當時の人々は海を航して各地に渡り、それより内陸の諸地方へと入つたであらう。小牧教授も考へられるが如く、古代太平洋沿岸の植民には、海流が與つて力があつたことは疑ひ得ないであらう。海によつて日本民族は、外に對して血の純一性を保ち得、その文化の特殊性を維持することが出來たと言つてよいが、それも海によつて日本と言ふ限られた生活空間が形成され、その社會は「相互的接觸」をなし得たからである。

先史時代に於いて日本の土地に住んだ人は、もとより漁撈狩獵が主たる生業であつたではあらうが、文獻に見られる時代に入つては、一般には既に農業が主要な生活であつたのである。然しながら現在に於いて沿岸を訪れ

た時には、全くと言つてよい程耕地の無い村々に出會はすが、その様な村の人達は餘程昔から漁のみで生活して來たのであらうか。農業を知らぬ人達であつたのであらうか。先史時代の人達をそのまゝに祖となし、又その生活様式をそのまゝ受けて、漁業のみでたて、來たのであらうか。けれども他社會に農業が進むにつれて、彼等も同様に農業を必要として來たであらう。にも拘らず、漁業で生活する村々は、恐らくは沿岸により強く地縁した社會にちがひない。

四周環海たる日本の國土は、朝鮮を除いては全部大小の島嶼から成る。此の數全部で七八五〇個を算し、此の周圍總延長五二・三三二料となる。斯くの如き長さの海岸線に於ける地形を見れば、斷層海岸であることもあるが、多くは隆起海岸か沈降海岸の單輪廻の海岸でなければ、隆起・沈降及び斷層の交代によつて生じた多輪廻性の海岸に屬してゐる。斯く複雑なる海岸地形は、あるところでは斷崖絶壁をなして海に臨み、直線狀の岩石海岸や突き出た岬を形成して磯をなし、多くの海藻や小魚を育

んだし、又あるところはさゞなみたつ入江となり漁民の喜ぶ「澗」となつた。こうした男性的な磯濱海岸が終ると、女性的な幾里も續く白砂青松の砂濱をなし、地曳網曳く「濱」を形造つた。此の様な種々様な海岸の交錯は、社會地縁の多様性を意味してゐる。又それら濱邊と怒濤を以つて相接する海の中には、四時滔々と潮が流れ、日本をば世界有數の水産國とならしめたのである。即ち暖流たる黒潮は、對馬海流を分流となし日本列島を南より北へと抱いて流れ、豊かな鯉漁場を太平洋側に、又寒流たる親潮は世界三大漁場の一たる鯨の漁場を北海道沿岸に生ぜしめ、兩者の潮境となるところは鮪やサンマ・鰹等の絶好の漁場となつたのである。以上述べた如き日本海岸の自然は、古來幾多の「網代」となつて日本民族の沿岸居住の機縁となつたのである。

屈曲多い日本沿岸を部落を訪ねて歩く時、種々様な聚落形態を有し、生活様式をもつ村落に出會ふのである。周りを峻嶮な嶺に取り圍まれ、入江の奥に出來た小さな三角洲平野に、あたかも押し込んだ如く密集してゐる

る集村や、又直線狀の斷層海岸に長々と續く列村、或ひは海岸段丘上に固り合つた塊村や、さては砂濱上に點々として建てられた納屋の列など、各種とりどりの形態を有してゐる。

それ等はいづれも海岸の地形に據つたのであらうし、又斯くの如き聚落の内部機能にも關連してゐるとも考へられる。

部落の生業よりみれば、純漁村が案外少く、半農半漁や所謂「海に背いた村」が多いのである。

よき港を持ち、廣い後背地を有する海岸部落は、海村の面影を消して都市的風貌を備へるに到つてゐるのも多く、逆に亦、陸路交通の發達につれて衰微し、生活の様式からして急に漁村や農村に轉ずることも出來ず、日々に衰へゆくあはれな耕地なき「町」もある。或ひは農村であつた平野の部落が、漁を求めて出村したのもあり、海岸にあつた小さな部落が何時しか退轉して、何處へか姿を消したこともある。興亡盛衰幾千年の歴史が、日本の沿岸に展開して來たことか。それ等は沿岸の自然環境

の規定を機縁とする幾多の社會の變遷過程であり、「地縁」の絶ゆまざる動きを示してゐるのではないであらうか。

海村としての特徴は何と言つても漁村にある。如何に海岸の自然を地縁とするも、海に背を向けた村は海村の特徴的な面を有してゐるとは言ひ難い。それは沿岸は單に「相互的接觸」の場所としてあるだけであつて、海岸の自然環境の規定を機縁としては、其處に何等農村としての平野の村々と區別される生活様式も生れて來ないからである。それと言ふのも、漁村社會は實に海をも地縁とするからである。

斯くあるが故に、漁村社會は特異な生活乃至行爲の様式を有し得るのである。

現在日本沿岸に於ける部落数は、村一八五一、(全國の村の一八・四%)町は五八二、(全國の三四・四%)市五三、(全國の四八・六%)にて、沿海市町村二四八六で全國の市町村の二一・〇%となる。⑩漁業者數一〇一四四七二で漸次減少の傾向が見られ、昭和五年では、遼洋漁業者一〇九〇〇〇人、沿岸漁業者數一〇〇一〇〇〇人で、其の他のもの及び漁業者の家族等總べて入れて

三百萬の人が漁業で生活し、全人口の四・七％である。以上の如き人々が現在日本の沿岸で活動するのであるが、其處に見られるが如く、沿岸漁業者の数が絶對多數である。又遠洋漁業者にしても大抵は沿岸の居住者で、日本の周縁の地域たる沿岸は彼等によつて眞に生活空間となつてゐるのである。

註① 古事記 大國主神の國土避讓の條

② 日本書紀、「海部」の地名が日本にかなり廣い範圍に亘つて存在するのも興味あることである。(加藤義雄氏「我が國古代生業に於ける漁獵・牧畜の重要性」——社會經濟史學四卷)

③ 櫻田勝徳氏「漁村民俗志」四四頁

④ 瀧川政次郎氏前掲書八頁

⑤ 「民族の本質は一つは(集團に於ける)特有文化の共同であること、一つは共屬の意識と意欲である。前者を民族の客觀的基底、後者を民族の主觀的基底とする。民族の客觀的側面たる文化共同體に對しては地縁が極めて重大な意義を持つ」(白井助教授による)

(此の問題に就いては紙數の都合上、省略し、何れ機をみて別稿に論ずることとする。)

⑥ 小牧教授「古代太平洋沿岸の植民と日本海流とに就いて」

——地理教育第三卷第一號

⑦ 澁澤敬三氏「日本民族と漁業」(龍門雜誌五七二)

⑧ 辻村太郎氏「日本地形誌」一四八頁

⑨ 最近に於ける一ヶ年の全世界總漁獲高は約一、二五〇萬噸、

日本沿岸に於ける社會の地縁

二〇億圓に達する。この内では我が國が第一で、年額約四億數千萬圓の巨額に達してゐる。(青野壽郎氏)

⑩ 最近の統計が筆者の手許にないので、取あへず昭和六年の統計に依つて置くが、一應の割合は解らうかと思ふ。

⑪ 農林統計月報(昭和十五年七月)による。

日本沿岸社會の封鎖性

と開放性

概して、海村で漁村となるのは耕地少きためであると解される傾向がある。岩石海岸の入江の奥にある部落でも、狭い三角洲平野に耕されるだけ耕して畑をつくつたり、或ひは田をこしらへてゐる處がある。さもなくば、岬の先や尾根の上の猫額大の土地に、後生大事に麥とか野菜類を植ゑてゐる。偶に努力家が現れて、埋立てや開墾をすると、その人を村の神様の様に尊んで、漁を放つて農業に轉じてしまふ。大體に於いて田圃のある村は、どんなに海に魚がるやうとも見向きもしないのである。大昔は別として、日本は神代より豊葦原瑞穗國であつたのである。農業は獎勵せられた事があつたと言へ、禁ぜ

られた事が無かつたが、佛敎の盛んだつた日本では、生き物を殺す漁業は屢々禁ぜられたのであつた。^①それは決して濫獲を防ぐためではなかつた。漁村は殺生をする人間の社會であり、無高所であつたのである。

漁業を主たる生業とする人々は、少くとも國の西半分に於いては幾分下つた賤しい人の如く思はれて居た、と櫻田勝徳氏が言はれるのは事實の様である。瀬川清子氏や羽原又吉氏に依つて公にされてゐる越前海岸新保浦枝村の城ヶ谷、鮎川浦枝村の清水谷、大丹生浦枝村の白濱の反子ソコ（又べざいとよ言ふ）は、明曆年中出雲國居野津から流れ着いたものであると言はれるが、土地の人の噂に依ると、坂井郡・丹生郡の海岸十數里の間に點々として漁村をなしてゐて、彼等の通婚地域も是等部落の内が目立つて多い。^② 彼等はそのオモ村と親方子方關係を結び、封建の主従關係の原則に束縛され、村落協同體外の新來者として農奴的漁業労働に従事してゐた。そして此處に興味ある湖主制度が行はれてゐて、彼等は漁獲物の販賣と言ふことから全く隔てられ、財の蓄積さるべき餘地が

なかつた。瀬川氏の調査された島根縣簸川郡北濱村では、出東方面の人が浦の人を新平民呼ばはりをするし、同氏の調査された廣島縣豊田郡幸崎町能地の濱部落は、漁民の元祖と言ふ意味で今もなほ蔑視的になつてゐる。櫻田勝徳氏が「漁村民俗志」に書いて居られる筑前糸島郡野北の漁師の「以前にはどう言ふものか、漁師は特殊部落の人並みに思はれてゐた。此の野北なども漁師、濱のものなど、呼ばれて賤視されたものだ。」と言ふ言葉や、又同書の「瀬戸内の佐木島では、猫額大の貧弱極る土壠の島に一人の漁師もぬ事を却つて誇氣に言ふ」なる記事、又小野祖敎氏の論説にみられる靜岡縣駿東郡靜浦村江浦が文化的に孤立し、婚姻なども部落内に限られ、外部のものからは特殊部落であるかの如く思はれてゐた例、^③ 能登の石崎や大呑、さては豊後都留部落のシヤア、日向、薩摩のドンキユウ等々漁村の蔑視、漁業の賤業視の例が數多い。

高い峰に取り圍まれた海邊に、耕地一つなく、他から封鎖された漁村の姿、日々農村に魚賣りに來るみすほら

しい恰好をした漁村の女、こうした漁村の姿が、又漁民の姿が、農民にとつて斯くの如く見られたのも別段不思議なことではないであらう。然しながら、此の様な漁村の姿は、實は漁村自身にとつては極めて自然な姿でなかつたか。彼等漁民は何故に耕地なき海岸に住むのだらうか。耕地少きが爲めに漁村となるのではなく、彼等には土地や耕地は必要でなかつたのではないか。農業を重んじ、農村の發達した日本に於いては、漁村や漁民が以上の如く考へられたのは當然であつたのである。勿論耕地少くして漁業を始めた部落もあるが、あたかも日本古代の海部の子孫の如く、古くから「海に地縁した社會」のあつたことを忘れてはならぬ。

資料缺いて、古代海人部の人達の生活様式は明らかでないが、それは漁村に残る古き姿の中に臆けながら推察されるのではないであらうか。彼等の社會は如何にして生れたのであらうか。雜賀崎のカツフネの如く、^⑥相ひ伴つて海にさすらひ、血のつながりを持つたのではなかつたか。而して亦彼等が沿岸に定住する様になつたのは如

何なる譯であらうか。

長崎縣西彼杵郡の崎戸浦の家舟が住家を持つ様になつたのは、最近の事と言はれる。それは祖先の祭のためとも解される。然し彼等は便所をどうしても陸につくらないと言ふことである。^⑦此の様な事が定住の原因であつたかどうかは勿論判然としないが、背後は山で海岸によい^⑧澗があり、附近に豊かな磯があり、又「ネ」がある所こそ彼等漁民の郷土となる所であつた様に思はれる。けれども斯くの如き自然に立地した彼等の社會は如何なるものであつたか。農村や山村は一般に封鎖性強き社會であると考へられてゐる。それは農民や山民の生活は概して農業であつて、彼等自身土地に結ばれると言ふことのほか、日本の地形から言つて極めて交通が困難であると言ふことにも理由がある様である。かくて他の社會との相互の交渉が絶たれ、而もその社會内の接觸が容易且つ自由であれば、所謂郷土社會、つまり封鎖的社會が出来て、その社會には他と異つた生活様式が支配すると考へられる。

現在漁村を訪れる時、あるかなしかの細い山路を長時間かゝつて上り下りせねばならぬところが極めて多い。たとへ相當の道路はあつても、交通機關なきため同様に長途を歩かねばならぬ。むしろ道路を一旦つくつても、人が通らぬ爲め荒廢してゆくことさへある位であり、彼等海民社會の相互交渉が絶たれてゐることを示す様にも思はれるのである。斯くの如き社會は必然部落内の團結強く、根強い慣習・風俗の支配することは當然である。特に定置漁業の行はれてゐる部落に於いてそれを認めるのである。

周圍を峨々たる八鬼山を主峰とする嶺によつて圍まれた熊野灘の九鬼は、嘗つては日本記録をつくつたと言はれる鱒の好定置漁場を持つ村である。九鬼氏の發祥の地と言はれ、地方とは極めて隔絶されてゐる。此の村では部落民全體で大敷組合をつくり、外來者は此の組合に入ることは殆ど不可能で、以前外から傭はれて來た水夫は、定住する時は名古なる別の部落をなして山嶽ぎをしてゐる。同様の自然條件の下にある三陸沿岸の綾里村砂

子濱なる小部落は、源氏の子孫と言はれるオホヤなる千田家より出たと言はれ、全部落は血縁的繋りありとされて、部落はあたかも一家の如くである。他村に對して猛烈に團結する。千田家は今こそ山林業であるが、先々代までは此の家を中心として一團となつて漁業を行つてゐたと言はれる。砂子濱と入江一つ隔つた對岸の越喜來村崎濱部落は同様の自然條件の下にあり、以前は網元なる二戸の舊家を中心として封建的な社會組織をなしてゐた。團結極めて強固であり、名子は以前の網主に對して極めて禮儀厚く、守隨一氏の調査に依れば、墓も中央に本家代々の大石碑を立て、その周圍にその別家たりカコたりし者の小さい石碑がそれを取巻く様に並べられてゐる。砂子濱の山一つ越した入江の岸にある野々前部落も、砂子濱と相似た状態と言はれる。櫻田氏の調査された三陸沿岸の普代村では一切の漁舟は地頭の家でつくり與へ、而もその舟に乘組む人々は、その舟が壞はれてしまふまで變ることがない。又同氏の調査された同沿岸の重茂村では、昔の舊家・本家が大きな中心勢力をなして

る。經濟的社會的中心をなすのみならず、部落のホンケと言はれる家は神をまつる別當家であるものが多かつた。此の様な部落機構に見られる封鎖的色彩は、單に此處に述べた諸部落のみならず、比較的交通不便に思はれる海村に見られる共通した姿の様である。此の他農山村でも見られる様々の現象の部落共同の仕事や、ハチブ、テフガイ、或ひは若者組を中心とする嚴格な村の掟^⑩、さては神事の營みや講とか、又は信仰や風俗などに見られる様々の生活様式は、農山村と同様に社會の封鎖性を示すものと考へられるが、此處では省略する。

主として農村に於いては、貨幣交換經濟の漸次的進化は既に徳川時代に於いて現はれ、やがて明治維新となつて經濟的集權組織並に資本主義制度の急發展の爲めに、地域經濟の互解を來し、その社會も地域的封鎖性が破壊されて行つたのであるが、漁村に於いては此の様な過程は、その歴史的研究の不充分のため、總じて見ることは困難である。クロノロジーの困難な民俗學的資料のみでは、それは到底容易に出来るものでないが、次に海村に

於ける開放性を示す一面に就いて考察し、此の事柄にも及んでみよう。

海民が海を渡つて沿岸に定住する様になつたと想像されるが、その頃の彼等の漁法は勿論近年見られる如き大謀網や巾着網の如きものであつたと考へられず、記紀にみられるものでは、大體釣と小さな網であつたらしい。現在家舟の人々は大き釣とか鉾漁或ひは小網である點より考へ、而して又漁村を訪ねて古い漁法を尋ねると、概して一本釣とか小網等を擧げることよりして、古い時代の海民は此の様な漁法で生活したのではないか。

さうならば彼等の漁する範圍も決して現在の如き或一定の漁場によることなく、自らよきネを求めて東西に舟を進めたこと、考へられる。「天下御免の一本釣」をやつてゐる紀州の雜賀崎は段々漁場が擴大して、自由に彼等のサゲ舟を操りながら、今は東の方は伊豆・三崎・房州邊まで、西南方は瀬戸内海は勿論、四國外海岸、九州一圓にまでも一本釣で出かける。但し正月や盆、或ひは年二回の氏神祭日には、何處へ行つてゐても必ず歸村せねば

ならぬが、その間は五十日六十日もお構ひなしで出かける。又打瀬網や鯨釣船或ひは延繩船も此の様な形をとる。鯨釣船も現在の如き發動機船にならぬ以前は、例へば熊野灘の阿曾ノ浦で管つてズンドテンマで行はれた如く、小さな舟に乗つて出かけた。伊豆の仁科^⑩では以前は、鯨釣・鮪延繩・それ以前は一本釣があつて熊野に出漁した。出漁間は陸に宿をとつて、魚はノウゼイ^⑪に賣つた。熊野へは土佐からも來てゐた。かくて宿で遊女の周旋もして呉れて、ヒメになるのは土地の女で、その結果ヒメの家に嫁入りした者もあつた。こうした漁民の交渉の事實は此の他極めて豊富である。彼等は實に農業の如く土地に結ばれることなく、洄游して止まぬ魚族を追うて動いたのであり、この様な習性は魚法が進むにつれてつくり出される大謀網や地曳網の時代に於いても變らず、九十九里濱の大地曳網は實に紀州の漁民の始めたものであつたし、各地沿岸の紛争は之等他國よりの侵入者との間に惹き起されるものが多かつた。

三陸沿岸廣田村の古くからの氣仙衆(師)・マヘカタ等

と言ふ出稼ぎや、家舟や海女が早くより日本沿岸の各地のみならず朝鮮に迄及んでゐる例等もそれである。近年發動機船が用ひられるに到り、益々相互の交渉は行はれてゐる。魚族を追ふて鯨船・鮪船は走つた。其等は毎年九州の南端より北海道まで往復するのである。のみならず遂には海外へと進出して行つたのである。沿岸漁業に於いても相互の接觸はいよゝ盛んとなつて行つた。三陸の「テンヤ」の社會は、こうした海村相互の接觸交渉を示すよき例と思ふ。以上述べた如き諸例は、何も近世資本主義經濟のみのもたらしたものでなかつた。古代より海に地緣した海民社會の自然の姿であつたのである。

以上述べた開放性は、實に海村相互の接觸交渉に於いて考へられるものであるが、然らば内陸の諸地方に對してはどうであつたらう。

前述の如く、漁村が蔑視されてゐたことは、水産王國日本にとつて極めて不愉快なことには違ひないが、その事自身は動かし得ぬ事實であつた。漁民は實に自給自足出來なかつた。

無高所の悲哀は此の點に於いてまことに深刻である。

農業を知つてからの日本人は何と言つても農産物を必要とした。然るに一度び農業を知つた人々は、魚の重要性を忘れて行つた。漁民は賤視されながらも、日本農民に缺いてゐる蛋白質の供給をしつゞけて來たのであつた。

長崎縣五島の家舟の妻や瀬戸内海の小網の船の妻は、生魚をかべつて陸の村々を賣つて歩かねば穀物は得られなかつた。村々に間屋や仲買ひが發達してからも、漁師の妻の古風な物々交換が保持せられて現代に迄及んでゐる。瀬川氏の調査された房總半島の千倉町の漁師の妻達は、シヨヒカゴボテと言つて背負ひ籠にタテ籠をあけて、暗い内から草鞋掛けて十里以内程の農村を賣り歩いた。

伊豆の仁科では昔は漁師のカミサンが頭上にサ、ギハングイをさゝけて色々魚を賣り歩いた。能登の石崎ではイタダギと言つて頭にのせて郡一帯に行商に行つた。

このイタダギは雜賀崎にもあると言ふ。山口縣の三見・黄波戸・立石・和久等の「シガ」は陸尺にシガベラと言ふ

魚籠を下けて遠方まで賣り歩いた。筑前野北のシガは今でも顧客が定まつてゐて、顧客とシガの間は誠に親密である。彼等は無論現金賣りなどせず、春秋の二期のとり入れ後に、その支拂の大部分を農作物で受けてゐた。同様な事が筑前鐘崎から流れて來たと言はれてゐる能登輪島の海士の灘廻りに見られる。(10) 三陸の普代村では、地頭の家馬二十四・五頭、牛十四・五頭あつて、耕作に用ひるのでなくて、月五圓か三圓で馬方・牛方を雇ひ、鹽及び鹽魚を山越えて盛岡在まで持つてゆき、此處で物々交換した。熊野灘沿岸の宿田會やその他では、昔鯉節にして海とか陸とかから名古屋方面へ賣りに行つた。此の様な事は以上の村々のみでなく、日本沿岸に於けるあらゆる漁村のもつところの一面であつたと考へられる。

こうした海民の魚賣りは瀬川氏の調査された徳島縣海部郡阿部村の如く、商法へと發展し、日本のみならず關東州・滿洲にまで出かけたところもある。島根縣那賀郡の波子では漸次商品と商圏を擴げ、北は千島の占守島から南は臺灣、更に朝鮮は勿論、滿洲チ、ハル・戰後の漢口・

南京にまで男女三百人が行商してゐる例すらもある。エ

ビス神が漁民の神であり商家の神である事も偶然ではなささうだと瀬川氏が言はれる。廻船や親船はやがて魚や米を積んで波濤を蹴つて往復した。船の泊る所には船宿が出来て、漁村の海産物を陸揚げするよき港となり、やがては交易の中心となつて都市へと發展して行つた所もあつたであらう。海村には斯かる開放の一面もあつたのである。封鎖性強き村の如く見えた九鬼も、以前には海運業が盛んで、大阪・名古屋通ひの船があつて魚を運び、あたかも港灣都市の如き風貌を備へ、一時尾鷲を凌ぐ程の文化町であつたとさへ言はれる。此處に述べた事實は、現在海村に見られる、又聞かれるところの「古きものの殘存」の中に見られるものであるが、吾々は此の事實の中に古い時代の海民の生活がうかゞはれ、眞に日本地域社會の相互的接觸の媒介者となつてゐた彼等海民の姿を想像し得られるのではないか。にも拘らず、沿岸社會が「海村」として、あくまで村落的封鎖性を備へてゐる様に思はれるのは如何なる理由によるのであらうか。次に彼

等海民の海の勞働を眺めてみねはなるまい。

註① 御歴代の天皇の内にも、佛法を信仰し給ふ餘り屢々漁業を禁ぜられてゐることがある。

聖武天皇、孝謙天皇、白河天皇がその例である。(片山房吉氏「日本水産史」による)

② 柳田國男編「日本民俗學研究」所載一四五頁。

③ 羽原氏は相木文書により承應・明暦年中以前より、幾度も出雲居野津方面より此の地方沿岸に流れ着いたと考證されてゐる。(羽原又吉氏「越前漁村澗主制度の經濟史的考察」——社會經濟史學第九卷八・九・十號)

④ 瀬川清子氏「ソリコの事」(島根民俗第二卷第四・五・六號附録)

⑤ 小野祖教氏「江浦の社會組織と祭祀俗」(國學院雜誌昭和十五年五・六月號)

⑥ 橋浦恭雄氏

⑦ 櫻田氏前掲書

⑧ 澗と言ふのは大體に於いて北陸地方一帯に船を入れる岩礁の入江を言つてゐる様である。(農林省經濟更生部編「漁村經濟調査」一、四ヶ浦の項)

⑨ ネは「根」で魚の集る岩礁の事を言ふ。

⑩ 漁業が共同勞働であるため、特に漁村に顯著であることが櫻田氏「漁人」に記されてゐる。

⑪ 小野武夫氏「日本村落史概説」

⑫ 櫻田勝徳氏調査

⑬ 三輪崎で聞いたところによると、昔は組合のことを納税と言つたと云ふ。

⑭ 中島東次氏「東北漁村の社會經濟史的硏究」——社會經濟史學十卷七號。

⑮ 頭上運搬

⑯ 沖合忠幸氏「船倉島の海女の灘廻り」(社會經濟史學四卷)

沿岸の生活

熊野灘沿岸の阿曾浦では、正月一日にボラ網祭りと稱する祭を行ふ。此の祭は現在なほ行はれて居り、昔から部落として最大の祭であつたと言はれる。海上で行ひ、ボラになる者からアラミのまねをする者も居り、魚を賣るまねまでする。帖面づけから女の荷物擔ぎまで居る。之等が協同してボラ網のまねをする。九鬼では一月八日及び三月・五月・霜月の各一日には頭の神事がある。正月の神事にはカギトリとして青年が遊谷配・里配として二人出る。二人は九木神社の籠堂に入つてコホリをとり弓の稽古をする。正月七日の晩タバッタ後、弓を引く祭

をするが、それは村組の指導の下に行ひ競争する。

若狭の日向は古來部落内が、沖組・中間組・沿岸組の三組に分たれてゐる。正月十五日には村の中央の川をはさんで、川の東西兩部落民がそれ／＼の組となり、寒中眞裸になつて川に飛び込んで綱引きをする。今では、正月八日の氏神宇波西神社の祭には、ゴサイ舟にお供へ物積んで競舟をする。此の様な競舟は壹岐・薩摩・瀬戸内・能登其の他にもあると言ふ。^②海村に於ける信仰が極めて原始的な形態を残してゐる事は、既に牧田茂氏の「海民信仰論」(國學院雜誌昭和十五年六月—七月)中に述べられてゐる船靈様にも見られるのであるが、海民の生活はとにかく自然に左右され、とかく原始的な形態をとり勝ちである。潮加減や天候で漁の増減が非常に大きなものである上に、彼等の人命にも關することであつた。時化に遭つて家舟一部落全滅した話や、物凄い津波に襲はれて家や舟が一瞬にして無くなつたこと、或ひは家の密集してゐるため火災がひどいこと等種々の悲劇が見られる。海民は常に農民以上に自然の偉大さを感じざるを得なかつ

たのである。よき潮の來る様にと濱で祈るシホマツリや、漁のある様にと祈る船靈様、或ひは又同様に漁を祈るエビス様は漁家各戸に祀られて、禮拜せられたり獲物を供へたりされ、又集つてエビス講など營まれたりする。海民の信仰は極めて熱烈である。砂子濱の如き村は別としても、地縁社會に於いて種々な意味でその結合の中心となるべき何ものかゞ存在する。漁村でも雜賀崎の如く、エビス様の祭りが中心となり、その日に歸村せないと除名處分を受ける様な村もある。斯くの如く神社は部落の中核であるが、その祭禮の時に彼等漁民の日常生活の感激が現れて來る様に思ふ。阿曾浦のボラ網祭り

も、古い部落漁を想ひ起し、當時部落で共同して行つた地下網に於ける豊漁の喜びを共に偲ぶと同時に、よき漁あれかしと祈り、大吉兆の縁起をかついだものであつた。九鬼の祭りも實に彼等部落民の日常生活の現れであつたのである。

九鬼では、古い漁法は灣内でやるシビの地下網であつた。漁業の總指揮者を村組と言ふ。

部落は古來遊谷地・里地の二つに分たれ、此の様な網がそれ／＼一つづゝあり遊谷配・里配と言ひ、兩者猛烈に競争し合ふ。そして獲つた魚は地下へ持つて來て全部に配分した。昔は此の網が村として最も重要なものであつた。

五ヶ所浦の長盛社と言ふ網組や、熊野灘古和のタチキリ網と言ふ地下網或ひは阿曾浦や須賀利村の網等、同沿岸には大抵の漁村が此の地下網を有してゐる。農林省の漁村經濟調査第一輯の波切町の所をみると、「漁業組合の實質は古來から地下として存在し、萬能的支配權を持つてゐたために威嚴を持つてゐる。實際波切町に來て誰しも驚く點は、町役場よりも漁業組合の方が嚴然としてゐる點である。若しも之を見て漁業者が裕福であるためにさうなんだらうと推測するならば、極めて大いなる誤りを犯すものである。これは一に住民、從つて漁民の性質と古來からの慣習に起因するものと言はなければならぬ。……現在の町村の母胎即ち町村制施行以前の町村に類する一部落を地下と稱し……。」とある。

熊野灘沿岸を歩く時、吾々は此の様な部落共同の生活をみるのであるが、そこには網主もなければ資本家もない。唯部落民全體が渾然と一體となり生活するのである。かくの如き部落の共同漁業は熊野灘沿岸のみならず處々に見られるものである。こうした部落漁の指揮者として選ばれる者が即ち「村君」であり「村組」であつたのである。現在に於いても、たとへ部落共同の漁業でなく網主經營の漁業にあつても、此の様な漁業指揮者たる村君、村組、船頭、沖合、シコウ等があり、漁民全體の中樞となつて活躍してゐるのである。現在一般に行はれてゐるのは臺網・巾着網・刺網・流し網・地曳網・打瀬網等であるが、何れも多人數を要し、極めて緊密なる協同勞働を必要とし、各人それ／＼の役割もきまつてゐた。

(詳細に記したらよきも、紙數の都合上省略する) 斯かる大規模な多人數を要する漁法に對し、釣とか小網の漁は非常に小規模であり身輕なものである。大抵舟も個人持であるが、一艘に四人乃至五人乗組み、而も單に一艘で出掛けるのでなく所謂カタフネで出かける。雜賀崎でもさうであり、岩手縣氣仙郡にも守隨氏が調査され、又越喜來にもあり、此處のカタフネは海の親友で、船頭同志又は船主同志寄り合つて打ちとけてのみ、始めてカタフネになる。出舟の場合お互ひにエサをゆづり合ふ由である。牧田茂氏の調査になる熊野灘の須賀利村では「モヤヒ」と言ふ言葉は船を二艘並べる場合に使はれてゐる。知多半島の中洲に於ける以前の一本釣或ひは現在に於ける海老の打瀬網の舟に乗組む者は、親類關係の者が多く、一つの舟に乗組む者も大抵きまつてゐる。伊豆の仁科に十年前程前まであつた鰹釣船は一八人乗組は多い方で、船方は大抵世襲であつた。十月二十日のエベス講に船元の家で來年舟方になつてくれる者を招いて酒盛りし、年明けて正月二日に乗り始めをした。此の後酒盛りをして乗組役割を決定した。船元が舟方として乗組むことは珍らしくなかつたが、船元自ら船頭たることは珍らしい。親方が船に乗組んでも船中では普通の漁夫で、乗組員としては漁夫一人の配當を得たにすぎぬ。最近二十年餘り前から斯かる僻村にも百噸二百噸の發動機船が出來て、鰹釣や鮪延繩

に南洋やミッドウエー附近までも出かけたが、彼等漁民の生活は變らない。而も一艘の船には沿岸各地の漁民が乘組み、社會の開放性は益々顯著に見られるが、その共同性は失はれず、むしろ更に新しき船の社會すら出来るが如くである。以上の諸漁の他、磯漁や鯨捕りがあるが、此の様な特殊の漁の中に於いても、漁民の生活は何等變る處はない。以上海民の生活を概観したのであるが、そこに眺められることは、漁撈は實に耕地の如く分割されぬ廣大無邊なる海に於ける彼等の自發的能動的な積極的活動に於いて行はれ、その成果は一に彼等海民の「腕」にあるのであり、而もそのためには自ら緊密なる共同の勞働を必要としたことである。漁業は農業の如く、種を蒔けば自然に稻が生え、米を實るものではなかつた。専ら積極的に、洄遊する魚族を捕獲せねばならず、沿岸に住む海民達はこうして自然の中より新しい技術を生み出し、自らの社會を育てて行つたのである。

註① 高谷重夫氏「九鬼とその附近」——(大阪民俗學會會報第

十一報)

- ② 柳田國男、倉田一郎共著「分類漁村語彙」七一頁以下
③ 櫻田氏「村君の殘存に就いて」(史學十九卷一號)

磯濱と砂濱

以上述べ來つた沿岸社會の特質から必然的に招來せられる經營組織は如何なるものであらうか。地下網を行つてゐた九鬼では、必然現在には部落共同漁業の型式をとるのである。

而して現在、何處の漁村に於いても組合を組織して漁業權を有してゐるのであるが、現行漁業法第四十三條により、組合の漁業を行ふを禁ぜられてゐる。そこで九鬼では漁業協同組合なる漁業權の主體に對して、共同組合なる大數組合を結成したのである。而して協同組合員は即ち共同組合員であり、又それは即ち部落民であり地下の人である。斯くて九鬼では協同組合より共同組合が威嚴を持ち、その組合員は地下の人に限られ、他郷人が入らんとすれば組合員の紹介を必要とし、總會に於ける嚴重な許可を得るを必要とするが、これは殆んど不可能で

ある。此の組合の仕事は極めて多く、共有林の他に衛生・勸業方面の仕事は勿論、宗教方面、さては大して問題になりさうにもない農業方面、神社の管理は勿論、鐵道の經費迄も組合で出す。須賀利村でも同様にブリ大敷を部落共同で行ひ、全部落残らず利益配當に興り、神職も雜貨屋も全村總べて漁師の鑑札を有してゐる。五ヶ所の長盛社もそれである。然し現在では全般的にみて以上の如き部落漁業の完全な形態を残してゐるものは大して多くなく、網漁で多いのは大抵共同出資で網を求め、組合より漁業権を借りて漁業をなすものや、網主・船元がめて舟子と共に行ふものである。然しながらその分配の方法をみるに、勿論以上述べた如き共同労働的色彩強く、所謂「代分け」制とか「歩合」制が多く、比較的企業的色彩強き漁業に於いても、月給の他に「歩」が當ると言はれ、一般的にみて平等分配が多いのである。船主・網主とても所謂「資本家」と言ふ程のものではなく、又前述の如く漁夫として自ら漁撈に従事し、その分配も魚見役や沖合・船頭の方が反つて多い位である。この事は海民の生活よ

り推して、當然といはれねばならず、アラミは優れて眼が利いて「イロ」や「ナブラ」をみる事が上手であり、村君や沖合は漁業指揮のコツを心得てゐる人であつて、海民中より選び出されたものであつた。漁業經營者としての網主・船主と水主・舟子の關係も、極めて封建的な色彩を有してゐたと言へ、企業的な雇傭關係でなかつた。

其の上網主や船主も永續するものではなかつた。經濟の不安定な漁業に於いては網主・船主の倒れる者が非常に多く、殊に現在の如き沿岸漁業不振の時となればそれが著しい。而して又漁業經濟の不安定さは、漁民をして財の蓄積を怠らしめ、漁村に質屋を多くし、漁民をして耕地や山林に向はしめ、更に漁村へ資本主義を流入させざる一因をなしたと考へられる。然しながら現在漁村がなほも非資本主義的色彩を濃厚に有してゐる理由は海民の生活と結びつけて左の如くにも考へられる。

千葉縣の九十九里濱は延長十八里に亙る大弓灣形の砂濱海岸であるが、海岸線の複雑なる日本沿岸中特異なる存在である。古來鰻の地曳網が盛んに行はれ、弘治・永

祿の頃紀州人の齋らした地曳網は、其の後大地曳網を現出させ、明治初年に到るまで盛大を誇つた。(安永年間に約二百帖もあつたと言はれる。)漁民は大部分が農主漁副で、農耕を營む傍ら地曳網の水主を務めるもの多く、彼等は海岸より數町岡に住居を持ち、その附近に住む大網主の土地を小作し、その田畑所持面積極めて零細であり、全然持たぬのが壓倒的である。網主は他面に於いて各自部落に於ける最高の土地所有者の一人であり、而も年々他を兼併してゐた。漁夫は網主に依つて雇傭され、雇傭に際して網主は漁夫に一定の前貸金を貸與したり、或ひは自分の土地を小作せしめて、その勞働力を緊縛してゐた。漁獲高の大半は網主がとり、水主の配分は生活を支へるにも足らぬ位であつた。然しながら盛大なる此の網も結局は「百姓漁で」あつた。やがて資本の漸次的發展に伴ひ、水主の生活に自由主義的經濟が次第に侵入すると、彼等の貨幣支出は増し、物價は騰つた。斯くて水主は他網に逃散を始めたのである。それに一段の拍車を加へたものは、砂濱海岸ならぬ「エト根」を漁場とする改良

揚繰網の發達であつた。斯くて兩者の抗争の裡にも歴史は容赦なく發展し、かくも盛大を誇つた大地曳網も全く九十九里濱より姿を消してしまつたのである。①結局は此の社會は「岡」に地縁した社會であつた。斯くの如く農奴的な地主的雇傭制度の社會に於いて、親方も一緒に共同一致、腕に依る彼等漁民の自發的積極的活動を要求する海の勞働をどうして爲し得やうか。而も又、彼等は沖合にすら出漁し得なかつたのである。此の様なことは時代の差こそあれ、單に九十九里濱のみに限つたことではなかつた。同様砂濱の伊良湖岬に近い瀨美半島の半農半漁村たる小中山も、此の様な結果に終つたし、同半島沿岸の農主漁副の高松も同じく沖漁をせぬため、沖合に來る機械船の爲めに衰微した。又砂濱ではよき潮がなく、そこに沖漁の出來る筈がなかつたのである。又富山灣沿岸に見られるが如く、砂濱の侵蝕のため漁をやめた所もある。漁民の郷土は矢張り、彼等の祖先の定住した耕地なき磯濱であつたのである。

漁村社會の非資本主義的色彩は、以上述べた如く、漁民

の生活と漁村社會の特性よりして説明出来ると思ふが、更に國家が沿岸漁民保護の爲め、稚魚をも獲る機械船の資本主義的經營を幾分抑へてゐる様に思へるが、既に時代は變つてゐる。日本沿岸社會の未來の姿は、一に世界史の展開過程に於ける國家の政策と、彼等日本漁民の魂の中に求められねばならぬ。

註① 九十九里濱のところは、専ら山口和夫氏「九十九里舊地 曳網漁業」(アチック・ミューゼウム彙報十二)、吉井幸夫氏「上總九十九里に於ける舊地曳網漁業」(社會經濟史學五卷)によつた。

② 例へばトロールの如き、機械漁業は必然沿岸を荒す上に人數が少くてすむと言ふ特徴を有してゐる。

む す び

磯の香にほふ海邊の路を村を訪ねて歩く時、海につき出た岬の蔭に、或ひは漣たつ入江の奥に、小さく固つた村落は、確かにお伽話の世界に出て來る村の様に思はれもするが、やがて純朴な村人に接し村の物語を聴いてみると、語られる古きものの殘存の中に、荒海と闘つて生

き抜いて來た海民の眞の姿がありと描き出されて來るのである。發動機を付けた近代の鯉漁船の浮ぶ靜かな入江にも、嘗つては十五・六人も乗組んで、ズンドテンマで共同一致櫓音も高く往復したのであつた。

然し彼等の生活には、何時も平和な日のみは續かなかつた。朝に出掛けた仲間の舟が、永遠に歸らぬ船路に旅立つたこともあつた。

又襲ひ來る津波の中に、人も、家も、網も、舟も、何處へか姿を消して行つたこともあつた。又財の蓄積なき漁民の中に、自ら漁具を購ひ、水主と共に働いた親方もあつた。然し其等は永く續いてゆくものではなかつた。漁法が固定するには彼等漁民にとつて、自然の力は餘りにも偉大であり、一般社會經濟の動きは大きかつた。捕鯨や大謀や巾着網も、幾多の悲劇を殘して没落して行つた。然し漁法は變れど社會は變らなかつた。沿岸に地縁し、海に生活した人々の社會は、幾らたつても沿岸社會であり、彼等はあくまで海民であつた。

彼等は次から次へと新しき漁法を創造して行つた。彼

等は日本沿岸の自然の複雑性に相應して、無量の技術を生み出した。そして魚族を追うて沿岸に散在して行つたのである。

否日本沿岸のみならず南海へ、北海へと進んだのである。小舟に乗つて漂泊した彼等祖先の生活そのまゝに。

外板グライベンにくつきりと描き出された日の丸のもと、海民をのせた漁船が、南へ、北へと波濤を蹴つて進むところ、

そこに沿岸社會の地縁より日本祖國社會の地縁へと益々高まりつゝある姿をみるのである。

(丁)

本文中屢々「地縁する」と言ふ語句を用ひたが、これは序丈註③に述べた如く全く便宜的なものであつて正統的な用ひ方ではない。唯他に適當の語句なき故一應使用したるに過ぎず、何れ適當なる語句あらば改めることにする。

(末尾ながら、此の稿を草するに當り特に御世話になつた、澁澤敬三・柳田國男・白井二尙の諸先生方や、農林省の櫻田勝徳氏、瀬川清子氏及び本學平山敏治郎氏、又日本常民文化研究所の所員の方々に、厚く謝意を表する次第である)